自分らしく生きる

アール・ド・ヴィーヴル
コンセプトブック

自分らしく生きる

アール・ド・ヴィーヴル
コンセプトブック

アール・ド・ヴィーヴルは、障害がある人が

自分のできること、得意なことを活かして生きる場所です。

わたしたちは一人ひとりが安心できる環境を整え

仕事を社会へとつなぎます。

障害があるからやってみたいことに挑戦できない、
そんな環境は変えて行きたいのです。

やってみたいことって何？ とアンケートを取ってみたところ
チャレンジしてみたい気持ちの多いこと！

アート、ヨガ、英会話、織物、料理、陶芸、フラダンス

一つづつ、実現してきました。

障害がある人の「やってみたい」という気持ちを受け止め、
環境をつくり、そっと背中を押すこと。

それが、アール・ド・ヴィーヴルのミッションです。

肢体に不自由があっても車椅子に乗ったまま描ける方法で
恐る恐る始めたその人は
自分だけの力で線が描けることに気づいた瞬間、
喜びの叫び声をあげてローラーを激しく動かしました。

車椅子から降りて、絵具の感触を手で確かめます。
緊張していた人の頬に赤みがさし、目が輝き、
花が咲くような笑顔がこぼれました。

最初は差し出された色を塗っていただけのだったのに
次第に色を選ぶようになり
さらには絵具のチューブを差し出すと、首を横に振り
スタッフの着ていたグリーングレーのパンツを見てうなります。
この色で塗りたいの？ と聞くと、
「そう、絵具にない色を作って欲しい！」と輝く瞳が訴えます。
支援員もお母さんもびっくり。

「娘にやりたい気持ちや実現したい思いがあることを
改めて感じる事が出来ました。」

どんな障害があっても、
表現するよろこびを味わってほしい。

表現することは、生きることそのものだと思うからです。

昨日の創作の続きをする人、新しい画用紙を広げる人、
織り機の前に座る人。
制作はしないで、販売の準備に夢中になっている人。
パソコン作業にトライする人、来客にお茶を出す人。

アール・ド・ヴィーヴルの事業所では、
決められたことをするのではなく、
何をするか、それぞれが自分で決めています。

障害がある人の周りにいる人は、良かれと思って
先回りしていろんなことを決めてしまいがちです。

ここでは、小さなことでも本人の意思を尊重したい。
自分で選ぶ、自分で決めるということを大事にしたいのです。
そして最後までやりきる気持ち良さを知ってほしい。

だから、私たちは、
「どうしたい？」と聞き続けます。

それを繰り返していくことで、
人は次第に自信がついて前向きになります。
自分で決めたことをやり通そうと思えるようになり、
自己を肯定する力が湧いてくるのです。

支援員は、観察のプロフェッショナルです。

事業所に来ても、ほとんどの人は、
すぐにはやりたいことが見つかりません。

何しようか、と小さな声をかけた後は、
支援員は、黙って さりげなく様子を観察します。
言葉より仕草のほうが、気持ちを雄弁に語っているのです。

たとえば、近くの席で絵具を使っている誰かを見つめる目の動き、
口の動き、体の向き、ほんの微細な表情。

羨ましそうな様子や、やってみたい気持ちをキャッチしたら
聞いてみます。
「絵具、使ってみる？」
頷いたら、すかさず道具を差し出します。

支援員は、〈待つ〉プロフェッショナルでもあります。

しばらくやりたいことが決まらなくても、
急ぎません。

時間がかかっても大丈夫。
いずれ時が来れば、どんな人もやりたいことが見えてくるから。

そしていつかは、
やりたいことを自分で見つけられるようになるのです。

障害がある人に、包丁を使う調理や火の扱いは危ない、
という人もいますが
やってみなければ、できるようにはなりません。
やってみれば、おいしい一品を作ることができるようにもなります。

終業時間になったら、毎日全員で掃除をし、
自分たちで整えたアトリエで翌朝を気持ちよく迎えます。

通い始めた頃は、ずっと車椅子に乗っていたメンバー。
でも支援員は、もう少しやれそうかな、と見ていました。
「車椅子を降りて、ちょっとそこまで行ってみる?」
「あれを取りに行ってみようか」
できたらみんなで大喜び。
やがて移動できる距離が延び、手洗いにも自分で行けるようになり、
今では、掃除の時間になるとモップに手が伸びます。
車椅子は扉の外です。

身支度、料理など、日常的な身の周りのことはもちろん、
販売や配達、農作業、
できる限りいろんなことを体験してほしい。
それが社会的な自立を支え、
将来の仕事につながる可能性があるからです。

ここまでしかできない、と決めて柵を立ててしまわず、
できることの幅をどんどん拡げていきたいのです。

一人ひとり違うテンポと歩幅で、一歩ずつ。

作品リースには、複製ではなく、必ず原画をお届けしています。
原画には描いた作者のエネルギーが込められているので
場を充電するようなパワーがあります。

リース交換には、支援員と共にメンバー自身が出かけていきます。
初めは緊張していたメンバーも、今は外出をとても楽しみにしています。
作品を車から丁寧に運び出し、挨拶をして、
梱包を解いて作品を取り出し、金具を取り付け、水平を確認して展示します。
作業が終わったら梱包をまとめて片付ける。
テキパキと作業するメンバーは頼もしい仕事人です。
「この作者の絵、好きです。いいですねえ。以前もありましたよね。」
と社員の方に声をかけていただいたことがありました。
それを聞いたメンバーがうれしそうに言ったのです。
「これ、わたしの絵です！」
わっと盛り上がり、みんな一緒に笑顔になり、
その空間は幸せに満たされました。

「障害者」という属性でなく、顔がある個人、社会的な人同士として出会える。
リース交換の場には、障害者理解という言葉を超えた、生の交流があります。
玄関、会議室、休憩室など、多くの方の目に止まる場所に作品が飾られ、
社会のなかでどんな風に受け入れられているかを、
メンバーはリース先で知ることができます。

事業所の外で、一人の社会的な人間として認知される喜びや誇りは
メンバーが次の仕事に前向きに向かう力を与えてくれるのです。

アール・ド・ヴィーヴルにはさまざまなお仕事をいただきます。

テーマのある絵の注文があると、スタッフはホワイトボードに書き出します。
花、竹、鳥、動物の親子、車椅子に乗っている障害者、なんていうオーダーも。
メンバーはリストを眺め、描けそうなものがあるとトライします。

時には、予想を超えるようなお仕事をいただくこともあります。
事業所を始めた当初、こんな仕事ができたらいいなと思い描いた夢が
現実となってうれしい反面、最後までやり遂げられるか、
描いたものがクライアントの要望に応えられるか、など
たくさんの不安もよぎります。

でも、メンバーは、頼もしく堂々と仕事を進めます。
大きな壁画を描いた時は、
絵具が垂れるとそれをうまく利用して画面を作ったり、
近くで描くメンバーが上から自分の絵に加筆しても動じない。
全体のバランスを考えて描くメンバーもいました。

期待され任されるから、最後までやりきろうするのです。
やり遂げ、達成感を味わう中で、
次第にそれを仕事だと認識し、気持ちも変わっていきます。

チャンスが与えられてこなかっただけ。
やってみれば実はみんなかなりのことができる。

メンバーの可能性が羽ばたける、
そんなチャンスをたくさん作っていきます。

アール・ド・ヴィーヴルでは、
2013 年に初めてのアートワークショップを開いた当初から
関係者だけでなく、広く一般の方に見ていただけるギャラリーで
プロのディレクターに展示企画をお願いして
展覧会を開催してきました。

開催期間中に行う「ギャラリートーク」ではたくさんの人の前に立って
作者たちが自分の絵について語る時間があります。

ぐるぐると丸が描き重ねられている絵も、
謎の図形で埋め尽くされた絵も、
濁った色で画用紙が塗りつぶされているだけに見える絵も、
作者から話を聞くと、ちゃんと意味や物語があることがわかります。

花火、旅先の思い出、動物を必ず 3 匹描くのは家族だから
作品に込められた作者の声から、毎回驚きの発見があります。

ゆっくり考えて言葉を紡ぐこと、発語が不明瞭なこともあって、
メンバーは、社会の中ではじっくり話を聞いてもらえる機会がほとんどありません。
時間がかかれば急かされ、代弁されてしまうこともあります。

でも本当は、自分の言葉で話したい、聞いてほしい。

ギャラリートークの日は、どんなに話すのに時間がかかっても
みんな耳を傾け、話を聞いてくれます。

マイクを握ると、言葉を探しながら、うれしそうに堂々と話します。
ちょっとおしゃれしてくる人もいます。マイクをなかなか手放さない人も。
顔を紅潮させて語るその姿は、光り輝いています。

ここには、さまざまな生きづらさを抱える人が通っています。

就職したけれど自分のペースがニーズに合わず、職を失って自宅に引きこもる、

家族と暮らしていても自分の居場所がない ...

それぞれ違う課題を持つ人たちにどんなサポートがよいのか。

目の前の人に今一番良い選択は何か。

私たちはその都度考え、悩みながら

試行錯誤の日々をメンバーとともに過ごしています。

新しい人が加わったり、不安定な状態の人がいるような時、

メンバーが笑わせて緊張した空気を和ませてくれることもしばしば。

そんな時、支援員は支援するだけではなく

支援される人にもなります。

障害がある人が、社会の中であたりまえに生活でき、

障害のあるなしに関わらず、誰もが足りないところを補い合い、

それぞれが自分らしく生きがいのある人生を送ることができる。

支援する側とされる側が分断されることなく、

誰一人として排除されない社会。

そんな社会を作っていくことが、アール・ド・ヴィーヴルの夢です。

アール・ド・ヴィーヴルは

「自分も関わっています」と言いたくなる場所。

他に行くところがないから行く場所ではなく、

「自分から選んで行く場所」だからかな。

「障害者は違うところで」という時代から、

今の世の中は確実に変わってきている。

それでも、障害が重ければ重いほど、

支えるだけで精一杯、という家庭も多い。

障害のある人達が社会に参加して、

地域と一緒に、今を楽しんで過ごせる環境を整えるために、

自治体、地域の企業、他の事業所との交流を進めていこう。

広い視野を持って、直接顔を合わせ、

補完しあうことが必要だと思う。

利用する人達が生き生きすると、事業所全体が楽しくなる。

そのメッセージを伝えてほしい。

他と同じじゃなくていい。

地域の障害のある人達がよりよく暮らせることを第一に。

その気持ちが、いつか全国に、そして世界に広がり、

つながっていったらよいなと思う。

一般社団法人日本外来小児科学会会長

小児科医　横田俊一郎

8 年前の春のある日、日本ダウン症協会小田原支部ひよこの会の会長さんからお会いしたいと連絡があった。小田原にアートを仕事にする福祉施設を作りたいのですが、協力していただけませんか、という切実な相談。それが現アール・ド・ヴィーヴル理事長萩原美由紀さんとの初めての出会いだった。
始まりは場所を借りて定期的に開催したアートワークショップ。表現することの楽しさ、大切さを体感してもらう積み重ねをした。親御さんたちの協力でコンパネを白く塗りアクリル板をつけた手作り額を作り、メンバーたちの作品を展示する展覧会をその後毎年開催。そこからベースとなる NPO 法人をつくり、4 年前に念願のアートを仕事にするコンセプトの就労継続支援 B 型事業所アール・ド・ヴィーヴルを立ち上げた。
こうして言葉にしてしまうと簡単だが、ほとんど基盤の無いゼロからのスタートは長い苦難の道のりだった。

昨今、障害がある人のアートが日本でも海外でも注目を集めている。
大胆な色使いや構成、驚くべき発想、人並み外れた集中力、今まで見たこともないようなオリジナリティがある形式など、いわゆる定型発達の人間では表現できないアート作品が日本各地の表現活動をしている福祉施設から生み出されている。
何故魅力的なアート作品が障害特性がある人たちから生み出されるのか。もちろん特性の反映もあるが、何より自分の事をわかってもらいたい、感じてもらいたいという強い思いがあるからだ。
作品そのものが生む芸術的価値はもちろん大切だ。しかし福祉施設にとって何より重要なことは「もうひとつの言語」コミュニケーション手段としての価値だ。様々な障害特性からうまく意思疎通ができないと思われている人たちにとって、表現活動はとても重要なコミュニケーションツール。その切実ゆえにクオリティの高い作品が生まれてくるのだ。生まれた魅力的な作品は企業や行政など社会と結びつけるツールになり、障害がある人たちの社会参加を後押しし、現場にフィードバックされてメンバーたちの自信と尊厳を育てていく。
これこそが未来の福祉の王道ではないかと思う。

1940 年精神病院のなかにアートを制作するプロジェクトを取り入れた精神科医ニーゼ・ダ・シルヴェイラの言葉「彼らにただ豊かな人生を送ってもらいたかっただけなのです。」この言葉が深いところでアール・ド・ヴィーヴルのコンセプトである「自分らしく生きる」に響き合い、未来とつながっていくのだ。

中津川浩章
美術家・アートディレクター

アール・ド・ヴィーヴルのあゆみ

アール・ド・ヴィーヴル　理事長
萩原美由紀

1990　ひよこの会が発足

神奈川県西地区に住むダウン症児とご家族が出会う場を作ろうと、ある保健師が提案して始まったひよこの会。保健所の講堂にて交流が始まった。2002年萩原がひよこの会会長に就任。以後 2013 年まで会長を務める。
2003 年、現在の公益財団法人日本ダウン症協会（JDS）に加盟、JDS 小田原支部ひよこの会となる。全国 5000 家族のダウン症の子ども達と交流し、先進的な活動を知り未来を描く。
ダウン症児を育てる家族にとって、ひよこの会との出会いは大きな意味がある。特にダウン症の赤ちゃんを育てるお母さんに、「あなたはひとりじゃないよ」と伝えたかった。
支部設立当時、ひよこの会の会員は 25 家族、賛助会員 6 名。現在は 43 家族まで増加している。

2012.3　ひよこアートワークショップスタート

障害者アートの第一人者、中津川浩章さんとの出会い。毎月のアートワークショップがスタート。メンバーは中津川さんとすぐに打ち解け楽しめた。最初は絵筆が進まなかった人がどんどんのめり込んでいく。「うちの子に絵が描けるのかしら」と半信半疑で参加していた保護者もこどもの表情を見ていて気持ちが上がって行った。
現在はアール・ド・ヴィーヴルのアートワークショップとして、障害がある幼児から大人までの参加者が集まり、月二回ペースで途切れることなく続いている。

2013.6　初めての展覧会『自分らしく生きる』を開催

中津川さんのディレクションの元、地元・小田原の ギャラリー新九郎にて第 1 回展覧会『自分らしく生きる』を開催。 ギャラリー近くのカフェでアールの作品を見かけて惚れ込み、ぜひうちで展覧会をやらないかと誘ってくださったのがギャラリー新九郎の木下泰徳さん。作品を購入してくださったのも、木下さんが第一号。

2013.8　NPO 法人アールドヴィーヴル誕生

さまざまな障害がある人が参加できる活動の場としてＮＰＯ法人化。アート、ヨガ、英会話、織物、料理、陶芸、フラダンスなど、各種ワークショップを定期開催。

2014.1　作品リースがスタート

数ヶ月に一回新しい原画をお届けする作品のリースサービスがスタート。現在の事業の大きな柱に。

2015.1　映画上映会『かすかな光へ』

埼玉県の障害福祉事業所でアート活動する「工房集」が舞台となっていたドキュメンタリー映画を上映（中津川さんは工房集のアートディレクターだった）。私たちが実現したいと願う施設の哲学がそこにあった。
「教育とは、命と命の響き合い、創造活動・アートなのです。」（教育研究者大田堯先生）

2015.8　映画上映会『みんなの学校』上映会

不登校ゼロを実現した公立小学校のドキュメンタリー映画を上映。満席の会場でトークショーも開催。
それから一年後、小田原市教育委員会主催の教員研修会に、みんなの学校の木村泰子校長をお招きして講演会が開かれた。映画のインクルーシブ教育のメッセージが学校へ、1000 人の先生へと繋がったうれしいできごとだった。

2016.4　就労継続支援 B 型事業所アール・ド・ヴィーヴルオープン

障害がある人たちが自分の特技を活かし事業化するアトリエとして事業所を設立。
それぞれの特徴を生かして働く、毎日の営みの中で「自立」を支援する場所。

2016.4　小田原駅地下街ハルネで作品展示

就労継続支援B型事業所オープンを記念して、小田原駅地下街ハルネにて企画を持ちこみ、各店舗へ中津川ディレクターと共に依頼に歩き、1ヶ月間の展示と、うめまる広場でライブペイントを開催。
作品を眺めていたお客様と店員さんとで会話が弾んだ、と聞き、アートは人をつなぐのだと実感。

2016.8　スクランブルダンス・プロジェクト

世界的な舞踏家　大野慶人さんを講師に、障害がある人とない人が一緒に踊るダンスワークショップを小田原市と共催で開催。
「みんなはそこにいるだけで、作品なんだよ」（大野慶人さん）
現在は世界的な人気を誇る舞踏カンパニー山海塾の舞踏手、松岡大さんにご指導いただき、2020 年 7 月の公演を目指す。

2017.5　東京湾岸　ウォールアートプロジェクト

川崎埠頭にある企業「株式会社松岡」の自家発電所の壁をアールが描くチャレンジングなプロジェクト。
企業と福祉施設をつなぐ中間支援の企業「株式会社ふくしごと」よりオファーをいただき、一日かけて全長 40 メートルの壁に海の世界を描いた。 埠頭にある各流通企業のみなさんの目に留まり和ませてくれていると評価をいただき、そのご縁から 2018 年 4 月「株式会社松岡」の新社屋のビルの壁面、エントランス、ドアのデザインにアールの作品を採用していただく。

2017.11　おおたか静流・中津川浩章『声のお絵かき』コラボ・ワークショップ

『自分らしく生きる 7』連携企画で歌手のおおたか静流さんをゲストにお招きした音楽のワークショップを開催。
障害がある人もない人も、一緒に声を出し、体を動かして声のお絵かきを楽しむ。 アンケートには「障害とは何か、と考えさせられました」という声が寄せられた。

2018.3　映画上映会『ニーゼ と光のアトリエ』

精神病院の中に絵を描くアトリエを作るプロジェクトを提案した精神科医「ニーゼ」の半生を描いたブラジル映画。
上映後、小説家の田口ランディさん・中津川ディレクター・牛山理事・萩原でアフタートークを開催。
「現実を変えたい、というたった一人の、一歩の行動から全ては始まるんですよね。」（田口ランディさん）

2018.7　箱根クラフトハウス　壁画ライブペインティング

箱根・強羅公園内にある「箱根クラフトハウス」の 15 周年記念で、地元商材、地元企業とのコラボ企画として東屋の壁画をペイントするお仕事をいただく。

「東屋」の存在は私たち作家たちへの創作意欲、発想の起爆剤として良い刺激となり、また来館されるお客様にとっては箱根強羅公園の想い出のスポットとなっています。海外のお客さまからもアートとしての評価だけでなく、今回の企画の趣旨を理解し称賛をいただいております。（箱根クラフトハウス・寺本和明さま）

2018.4　神奈川県『ともに生きる社会かながわ憲章』
普及啓発イベントロゴ制作

津久井やまゆり園の事件を二度と起こさないために、『ともに生きる社会かながわ憲章』が制定され、普及啓発イベント『みんなあつまれ』ロゴをオファーいただく。アートワークショップを担当。来場者とともに描く。

2018.7　神奈川県「共生共創事業」のメインビジュアルに作品採用

2018.10　鈴廣かまぼこ博物館　『自分らしく生きる 9』

鈴廣かまぼこ博物館の展示室にて展覧会を開催。鈴廣さまとしても外部団体との初めてのコラボ企画となる。

2019.2　映画上映会『地蔵とリビドー』

滋賀県にあるアート活動を長く実践している生活介護施設「やまなみ工房」が舞台となった映画の上映会を開催。やまなみ工房の山下完和施設長・中津川ディレクター・牛山理事・萩原でアフタートーク。閉会後も熱気に包まれ、握手を求める列がなかなかとぎれなかった。
「世界に評価されるアート作品を作るとか、そんなことはゴールにしていない。ただ彼らが穏やかに過ごせるにはどうしたらいいのか、それだけを考えている。」（山下完和施設長）

2019.4　重度障害がある人のためのワークショップ開催

「独立行政法人福祉医療機構（WAM）」の助成によって、念願のワークショップを合計 20 回実現。車椅子に乗ったままの重度障害のある人が次第に自分の力で描く楽しさに気づき、喜びを声や体で表現してくれた。アールのアトリエのほか、アウトリーチとして小田原養護学校や、足柄療護園などでも開催。

2019.6　ワラビーズ歓迎　パッカー車ペイントワークショップ開催

ラグビーワールドカップ開催の年。小田原市で合宿をおこなったオーストラリア代表チーム「ワラビーズ」を歓迎するアートワークショップを小田原市の委託をうけてアールが担当。株式会社小田原衛生工業ご提供のパッカー車（ごみ収集車）をボランティア含め総勢 100 名以上でペイント！オーストラリア大使館からも応援いただく。

2019.6　『自分らしく生きる 10』開催

第 10 回目の展覧会開催。ギャラリートークをおこなった日、会場となった「ギャラリー NEW 新九郎」の 1 日の来場者数を更新。

2019.10,11　「かながわ SDGs パートナー」
「おだわら SDGs パートナー」登録

SDGs アクションブックかながわ（2019 年 3 月発行）にアールが掲載されたことがきっかけ。県内・市内の団体との交流が増えていく。

to be continued…

全ての展覧会およびワークショップの
アートディレクション・ファシリテーション
中津川浩章

アール・ド・ヴィーヴル　コンセプトブック

自分らしく生きる

2020 年 3 月 1 日発行

企画・編集・発行　指定 NPO 法人　アール・ド・ヴィーヴル
250-0055 神奈川県小田原市久野 906 アネシスヒルズ 102
電話番号・FAX : 0465-25-4534
info@artdevivre-odawara.jp
http://artdevivre-odawara.jp/

構成・編集　Studio PANDA 牛山惠子
写真　アール・ド・ヴィーヴル
協力　中津川浩章・萩原美由紀・横田俊一郎・アール・ド・ヴィーヴル
ブックデザイン　阿部太一 [TAICHI ABE DESIGN INC.]

助成　2019 年度　独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業

© 指定 NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル
無断転載厳禁